

09・サリアのどれい

『08・あの日の約束』から一か月後。

一月下旬。時間帯は六時ごろ。天気は晴れ。気温は十度程度。

主人公とサリア、大陸東部のとある街の宿に泊まっている。

あの後二人は、改めて今後についてじっくり話し合った。

まず主人公は、今後も勇者として冒険を続けたい意向を伝えた。

次にサリアは、もちろんそれに協力するつもりだが、かといってすぐに自宅を長期間空けるのは、この家で働く人間としても、体力的にも難しい事。

それから、可能であれば主人公の経過を見たいので、今後もこの家で定期検診を受けてほしい事を話した。

結果、二人は一緒に冒険には出つつ、クエストを一つ終えるごとにサリアの家に戻る事。もし、サリアが仕事でどうしても家を空けられない時は、一時的に離れて暮らす可能性もある事。

だが、基本的には一緒にいて、だんだん、家に戻るまでの間隔を長くしていこうと思っている事。

その間、定期的に話し合いの時間を作りながら、今後の予定を決めたり、あるいは状況に合わせてプランを変えたりしていくのが最適ではないかという事……と、移行期間を長く設ける形でまとまった。

それは自分たちらしくないくらい、前向きで建設的な話し合いだった。これまで目先の欲求に溺れ、問題を先延ばしにしては失敗を繰り返してきた自分たちも、さすがに成長したのである。

そして昨日、二人は強敵モンスターを倒した。

サリアは、いくら天才とは言えど、引きこもりだった自分が、果たして戦闘で役に立つのか不安だった。だが、意外と何とかなるものである。

かつてのように、サリアが指示を出して、主人公が動く。

それから新たに、サリアが後方から支援する……。

というスタイルが、自分たちにはぴったりだったのである。

なお、主人公は、今後剣と銃の両方を扱っていく事になった。

曰く『私とサリアちゃん、二人とも遠距離型では、ちよつと危険すぎる』との事。

まったくその通りである。

こうして戦いを終えた二人は、昨晚さっさと布団に入った。

主人公は早々に眠ってしまったが、サリアは興奮のあまりよく眠れず、今、とうとう朝日が昇ってきたところである。

サリアはとにかくビビりで繊細なので、何かあるとすぐに眠れてなくなってしまふのだ。……でも、今後はそれも伝えて行こうと思う。

また、主人公のためにと無理をして、あの時と似たような失敗をしたら、あまりにもバカだからである。

そんな事を考えていると、目の前の生き物が動き出した。

SE1 .. 外で鳥が鳴く音

【最初から流す】

【0―8秒ほどまでの、カラスの鳴き声が聞こえる前までを流してフェードアウトする】

【音量を小さめにして流す】

SE2 ..主人公が布団の上でもぞもぞ動く音

【最初から流す】

【0―8秒ほどまで流してフェードアウトする】

サリア、主人公が起きた事に気づいて、優しく声をかける。

●中央

【優しく】

ん？ まだ寝てて大丈夫ですよ。

昨日の敵は相当手ごわかったですし、疲れたでしょう。

チェックアウトまでゆっくりしましょう？」

主人公、何も言わずにサリアに抱きついてくる。それからサリアの胸に顔をうずめて、まだ何も言っていないのに、まるで自分のもののように触ってくる。

……すっかり甘え癖がついている。

もつとも、サリアがそうなるように仕向けたのだから、サリアはご主人様として責任を取らなくてはならない。

●中央 至近距離

「呆れつつも嬉しい」

はいはい。おっぱいね。

【とはいいつつ、まんざらでもない】

ふふ。どうぞ。いくらでも甘えていいですよ？

●中央 下

【乳首を吸われて、呼吸が漏れる】

ん……。

☆【※30秒※ ゆっくり呼吸する。気持ちいいが、余裕がある】☆☆☆☆☆

はあ……はあ……♡ふうっ……。んっ。あ……。ん。はあ……はあ……あ……。

【すごく優しく。母親のように】

顔見せて？

☆【※15秒※ キスする。優しくて甘いキス】☆☆

ちゅっ。ちゅっ……。♡れる……。ちゅっ♡くちゅっ、ちゅ♡

【上機嫌で】

ふふ。今日も可愛いなくあなたは♡」

〈主人公〉

「ねえ……サリアちゃん……」

●中央 至近距離

「上機嫌で」

なあに？」

サリア、すっかりその気になりかける。

しかし主人公は急にサリアの胸を触るのをやめて、こちらを見ると、妙な事を言い出す。

〈主人公〉

「私、新しい推理があるんですけど。」

二か月前、身動きの取れない私に、サリアちゃんが無理やりえっちしてきた件についてなんですけど。

さっきまでその頃の夢を見てて、急にひらめいたので聞いてくれませんか？」

●中央 至近距離

「まさかその話をされるとは思わず、驚く」

え？ 今その話ですか。夢に見たの？」

えっ。起きるなりこんな事してきたって言うのは『昨日はすぐ寝ちゃって、えっちな事ばかりから、朝からしましょう♡』とか、そういう事じゃなかったんかい。

落差激しすぎるでしょ。

……ところで。い、一体勇者様は、何をひらめかれたのでしょうか？

ていうかもうこの子、マジで探偵だな。

もう、何をとは言わないけど『サリアのたんてい』に変えた方がよくない？

〈主人公〉

「サリアちゃんはその時『この麻酔は、全身を気持ちいい事に集中させて、痛みを耐えさせる薬だ』って言いました。

それから『気持ちよくなった後は、身体がとろんってなるから、それが私を守ってくれる』とも言いましたよね。

つまりそれって、気持ちよくなると麻酔の効果が高まる。

麻酔の効果が高まる事で、私は痛みを感じないどころか、幸せな気分でいられる。

これによって、いい気持ちのまま、治療を続けてもらえる。って事ですよね？私知ってます。あの時は麻酔がかかってたからわかりませんでしたけど、治療魔法ってかなり痛くてつらいって。

サリアちゃんは、えっちする事で私の苦しみを和らげて、守ろうとしてたんじやないですか？

そうするしか、あんなひどい怪我をした私を助ける方法はなかったんじゃないですか？」

● 中央 至近距離

「言いたくない。なんとかうまくかわしたい」

あー。えっとねーそれはねー」

5秒ほど間。

サリア、この期に及んで、何とかごまかそうとする。

だが、主人公はもはやあきれ顔。完全にサリアの自白待ちだ。

……言い逃れはできなさそうである。

●中央 至近距離

「観念して、落ち着いた口調で」

うん。当たってますよ。目を覚ました日、無理やりあなたを抱いたのはそういう事です。

でも

【わざと軽薄に言う】

『このままじゃ麻酔の効き目が足りないから、増幅するためにえっちするよ♡ でないと、あなたは痛みに耐えられず死んじゃうんだよ♡』

【急に元のトーンに戻る】

なんて言うのおかしいでしょ。だから言わなかっただけです。

【声のトーンが下がる】

理由があつたって、許される事じゃないですし」

〈主人公〉

「どうして言ってくれなかったんですか？

そりや、すぐに本当の事が言えないのは、仕方ないかもしれません。

……でも、ちゃんとお付き合いするようになってからも教えてくれないなんて。

これって『許す、許さない』どころか、お礼を言わなきゃいけない事じゃないですか。

たとえ、サリアちゃんがこれをどんなに許されない事だと思っていたって。

私は怒っていません。……理由を聞けば、全然、許した……ううん。

理由があってもなくても、私は許すし、サリアちゃんを好きな気持ちは変わらなかったんです。

ていうか『理由を話したところで、許してくれないかも』って思われてた事の方がショックです。

……サリアちゃんって、基本私の気持ち、信じてないですよ。

人の話聞いてないんですかね？ 耳聞こえてます？」

サリア、主人公の言葉に胸がきゅんとなるが、一部の言葉に関しては、つい反撃したくなる。

なので思わず『人の話を聞いてない？ それはあなたも同じでしょ？』と言い返したくなるが、やめる。

ここで話をそらして、喧嘩を始めるのは簡単だ。

でもそれは、主人公が今話したいと思っている事ではないし、自分がするべき事でもない。

●中央 至近距離

「素直に謝る」

ごめん。あなたの言う通りです。

言い訳なんかしたらダサイと思ってましたけど。長い間、あなたを不安にさせましたよね。

ごめんなさい。ずっと言えなかった事、許してくれますか？」

〈主人公〉

「もちろんです！ それに、これは言い訳じゃないですよ！ 立派な『動機』です！」

いちいち語彙のチョイスが探偵っぽいな。

ていうか本当元気になったな。前はこんなにプンプン怒ったりしなかったのに。本当に明るくなったなあ、この子。

それは、あたしの力によるものだって、思ってもいいんですかね？

●中央 至近距離

「低めの声だが嬉しい」

そっか。ありがとう。

【少し間をあけてから。ここから、照れ隠しにしようもない事を言ってしまう】
あなたは本当に変わってますよね。

あなた程の人なら、いくらでも素敵な人と幸せになれるでしょうに。
こんなあたしを選んじやうなんてどうなってんの？
おっぱいに負けたか？」

主人公、ゆっくり首を振る。

〈主人公〉

「そんな、実にしようもない事を言っちゃう、大変しようもないところまで好きなので……」

うわ。二回もしようもないって言われた。本当にしようもないから仕方ないけど。

●中央 至近距離

【ますます照れる】

う。ごめん、言わせた。

【少し間をあけてから。恥ずかしそうに】

でも、ありがと。嬉しい。

【ここで『ハッ』と気づく】

てかさ。あたしも今気づいたけど。

もしかしてあなた、あたしの教えをずっと忠実に守ってました？
弱そうに見せて油断させて、相手が隙を見せたらってやつ。

だからあの時も、一回いなくなるフリして戻ってきたんだな？」

〈主人公〉

「そうですよ？ 私はサリア先生の最高の生徒なので！

このままいけば、先生を凌駕するのも時間の問題ですね」

主人公がサリアを見て、フフン。と笑う。

それは思ったよりも、なかなかむかつく感じの笑い方だったが、まあいい……。と、サリアは思う。

主人公はもう、サリアの愛情を疑ってない。だからこんな事を言ったり、こんな顔を見せてくれるようになったのだ。

●中央 至近距離

「優しく」

あなたはいつも、あたしの想像を超えていきますよね。
だからこんなに好きになったのかな」

〈主人公〉

「本当ですか？ あのね。今後は、もっとすごくなりますよ。
サリアちゃん、きっと惚れ直しちゃいます」

●中央 至近距離

「嬉しくて笑う」

あは♡ それは楽しみです♡」

そこでふと、サリアは思い出す。

そうだ。今後。今日はこれからどうしよう。

昨日はここに来てすぐ勇者ちゃんが眠ってしまったから、何も決めていなかった。

であれば相談だ。あー。相談に乗ってくれる相手がいるって、なんて幸せなんだろう。

●中央 至近距離

「【思い出して、たずねる】

ねえ。今日はこれからどうしましょうか。一度うちに帰りますか？

それとも、近くの湖まで行ってみます？　そこでレア素材掘ってボロ儲け的な。

あとね、南の洞窟も楽しそうなんです。今のあなたとあたしなら……」

〈主人公〉

「サリアちゃん」

●中央 至近距離

「【機嫌がいい。主人公が何を言うのかわからないが、それでもよい】
んー？」

〈主人公〉

「私、最近サリアちゃんがすごく楽しそうで嬉しいです。

最初は、私、無理やり連れてきちゃったのかなって不安でしたけど……。
なんだか安心しました」

●中央 至近距離

「優しく」

ふふ。うん。楽しいです。

「かみしめるように」

あたし、あなたと一緒にだと、何でも楽しいみたいです。

「少し間をあけてから」

ねえ。あたしに新しい世界を見せてくれて、ありがとうございます。
あたしの人生、左側なくした時に全部終わってて。

後は、あの家で眠ったみたいに生きるだけだと思ってたのに。
あなたのおかげで、今は生きてる実感ありまくりですよ。

「少し間をあけてから」

愛してるよ。今度こそ、何があっても守りますからね」

〈主人公〉

「私もです。そのためにも、もっと強く、もっと賢くなりますね。
そうしたらきっと、世界がもっと明るくなると思うから」

●中央 至近距離

「優しく」

ありがとう。

【少し間をあけてから】

じゃあ……ちよつと早いけど。支度します?」

サリア、主人公の左耳にささやく。

●●左 ※マークまでささやく

「優しく」

夜のえっちのためにもね♥ ※

【左耳に軽く一回だけキスする】

ちゅっ♥

このままフェードアウトして終了。